

氏名 安富 絵里子
授与した学位 博士
専攻分野の名称 医学
学位授与番号 博 甲第 6337 号
学位授与の日付 2021年3月25日
学位授与の要件 医歯薬学総合研究科 病態制御科学専攻
(学位規則第4条第1項該当)

学位論文題目 Switching between Three Types of Mesalazine Formulation and Sulfasalazine in Patients with Active Ulcerative Colitis Who Have Already Received High-Dose Treatment with These Agents
(高用量メサラジン内服で加療を行っている潰瘍性大腸炎再燃におけるスイッチの有用性の検討)

論文審査委員 教授 西堀正洋 教授 大塚文男 准教授 江口 潤

学位論文内容の要旨

経口メサラジン/サラゾルスファピリジン(SASP)製剤は潰瘍性大腸炎(UC)治療の基本薬である。本邦では現在3種類のメサラジン製剤とSASPを用いることができる。メサラジン/SASPから他の製剤へのスイッチの有効性についてはよくわかっていないのが現状である。本研究では3種類のメサラジン製剤およびSASPのスイッチの有効性につき検討を行った。

【方法】

2006年1月から2019年3月の間に当院でUCに対し高用量のメサラジン/SASPで加療を行っている患者に治療強化目的に他のメサラジン/SASP製剤へのスイッチを行った症例を対象とし、その有効性につき検討をした。

【結果】

88症例106回のスイッチを対象とし、メサラジンからSASPへのスイッチ、メサラジン同士のスイッチ、SASPからメサラジンへのスイッチの3群に分けて解析を行った。2ヵ月後の有効性はメサラジンからSASP:23/59(59%)、メサラジン同士:18/55(33%)、SASPからメサラジン:2/12(17%)であった。有効であった43症例のうち9例は遅れて無効もしくは不耐となった。2ヵ月時点で無効であったがその後有効となった症例は4例であった。

【結論】

特にメサラジンからSASPへのスイッチは半分以上の症例で有効であり、治療の選択肢の一つとなりうると考えられた。

論文審査結果の要旨

潰瘍性大腸炎はクローン病とともに炎症性腸疾患の代表的疾患である。軽症～中等症の潰瘍性大腸炎治療の寛解導入および寛解維持の基本薬剤として、5-アミノサリチル酸(メサラジン)あるいはサラゾルスファピリジン(SASP)がある。本邦では3種類の製剤のメサラジンが使用されているが、治療期間中に起こってくる治療薬製剤の選択と変更が治療効果とどのように関連しているかについての報告は、殆どない。そこで本研究では、2006年から2019年の間に岡山大学病院で治療を受けた患者88症例で、3種類のメサラジン製剤およびSASP間で行われた処方変更の有効性につき、後ろ向き解析を行った。その結果、メサラジン製剤からSASPへのスイッチは半分以上の症例で有効であり、潰瘍性大腸炎治療の選択肢の一つとなり得ることが示唆された。SASPからメサラジンへの変更では、有効例が少なく、メサラジン製剤間の変更は中間的であることが明らかにされた。副腎皮質ステロイドや免疫修飾薬等の併用薬使用の影響や、治療薬変更の判断基準について指摘があり、これらの点につき議論された。

よって、本研究者は博士(医学)の学位を得る資格があると認める。